

『劔は裁く』 (六卷)

脚色者 帝キネ小阪映畫  
監督者 山口三春氏  
撮影者 伊藤大輔氏  
保田庸氏

主要役割

刀鍛治國正 市川 幡谷氏  
妻 お管 千枝子嬢  
息 國次 市川 玉太郎氏  
娘 お露 森 静子嬢  
女中 お高 小池 春枝嬢  
弟子 正信 片岡 紅三郎氏

與力

安藤昌平 東 良之助氏  
上役人の娘 浪乃 福岡 君子嬢

〔略筋〕徳川の治世既に百年の頃。寂れ行く奈

其の都に國正と呼ぶ刀鍛治があつた。倅の國次

は無頼の徒と交り常に母お管を泣かせて居た。

娘のお露は噂に高い美人であつた。國正は見込

なき倅を捨てお露と戀仲である一番弟子の正

信とお露を夫婦にして跡目をつがせる心であつ

た。親に許されたお露と正信は楽しい日が續い

たが正信は修業の爲め一ヶ年を約して京の都へ

別れて行つた。與力安藤は或る日お露を見染め

てから影の如くつき纏ふく居た。或る日お露は

女中お高と母の病氣平癒願に行つた歸り路、

激しい雷雨に避難した小屋で安藤の爲め處女の

誇りを奪はれた。折からの落雷でお高は震死し

お露の秘密は誰も知らなかつた。安藤はその後

上役の娘の手に入れ榮達を計らんとしてお露を

願ひなかつた。一ヶ年は過ぎ正信は名刀を打つ

て歸つて來た。お露は凡てを正信に訴へた。正

信は憤怒し怨の刃を安藤に向けた。お露は正信

への申譯に入水した。正信は怨は晴らしたが已

れも又深傷を負つて斃れ正次は犯した罪に依つ

て捕はれた。總てを失つた國正は黙々として刀

を打つて居たが老の眼には涙が滲んで居た。

伊藤大輔氏の處女時代映畫で市川幡谷氏一派

の第二回作品である。第壹回の『獨體の印籠』

などは比較にならない程優れて居る。それで

勿論伊藤大輔氏の監督が鮮やかであつたからで

ある。氏が最近現代劇、稍々行詰つた感のあつ

た事を憂へた評者は、最初の時代映畫に氏が

成功した事を歡喜して止まない。それは今後氏

が必ずや時代映畫に向つて新たに開拓の道を開

く事を信するが故である。露々喜多呂九平氏と

共に我等は氏の時代映畫を期待して見るべき價

値がある。この『劔は裁く』は勿論試作品とし

て見たいが脚色に於ても監督手法に於ても露

々喜多氏とは全然異にした行き方で實に頭の見

識が少くない事を我等は認めた。そうしてそ

れは氏に對する期待を大ならしめた。お露の運

命を雷雨を利用して表徴した場面など正に新機

軸の面白いと思つた。俳優も可成り生きて居る

幡谷氏の役などもあつて好い。森静子嬢のお

露も今度ば獲つた好き味を伊藤氏の繊細な指

導に依つて遺憾なく出して居る。紅三郎氏の正

信は意外な成功、マキノ時代とは雲泥の相違の

力強い演出で評者を驚かせた。撮影も美しく月

に満點に近い時代映畫である。撮影も美しく月

(拾壹月廿七日、大阪青森劇場封切) 山本 綠葉